【研修報告】

Participation in the 7th Congress of the European Union Geriatric Medicine Society (EUGMS) : Spanish Way of Life

宇　野　久　光*

はじめに

前回アイルランドで開かれた，第６回のEuropean Union Geriatric Medicine（EUGMS）に引き続き，今回も本会議に参加させてもらった。今回のテーマはnew therapies for an aging Europeであり，53 Congress de la SEGG（Sociedad Espanala de Geriatría y Gerontologia）および 32 Congress de la Sociedad Andaluza de Geriatría y Gerontrogía（SAGG）との共催であった。

今回の開催地は，スペインのアンダルシア地方の地中海に面したMálagaであった。当地は，Costa del Sol（太陽の海岸）の中心であり，ヨーロッパの代表的なリゾート地であるようで，ヨーロッパ各地と航空路線がつながっている。この地には，ヨーロッパ中から退職者が老後を過ごすためにやってくる地でもあるということで，老年医学の開催地としては，象徴的な場所であるとは，開催者の弁であった。以下学会の印象記を記す。

学会の内容

学会の会場はMálaga市の郊外にあるPalacio de Ferias y Congresos de Malaga（マラガ市の展示と会議の宮殿；コンベンションセンター）であった。人口55万人の都市には不釣り合いに大きい建物である（図１）。

初日のPlenary Sessionでは，イタリアのFranceschi氏の“Inflammaging: a systemic biological approach”と題した講演は，最近のaging mechanismに関する幅広い知見を紹介した（図２）。演題のタイトルは，Homo sapiensではInfamming aging is a major component of immunosenescenceという趣旨からくるもので，腸内細菌叢がさまざまな代謝過程を通じて細胞の老化過程や発癌に関与していること，障害細胞から放出されるミトコンドリアＤＮＡ断片が組織の炎症指標さらに老化指標となることなどを豊富なデータで示した。ドイツのDieter Lüttje氏の“Geriatric Education as the key to harmonization throughout Europe”と題する講演は，ヨーロッパにおける老年医学の現状報告で，多くのヨーロッパ諸国で進展を遂げている老年医学も，財政状況，政治状況などの制限要因があることの問題点を述べた。

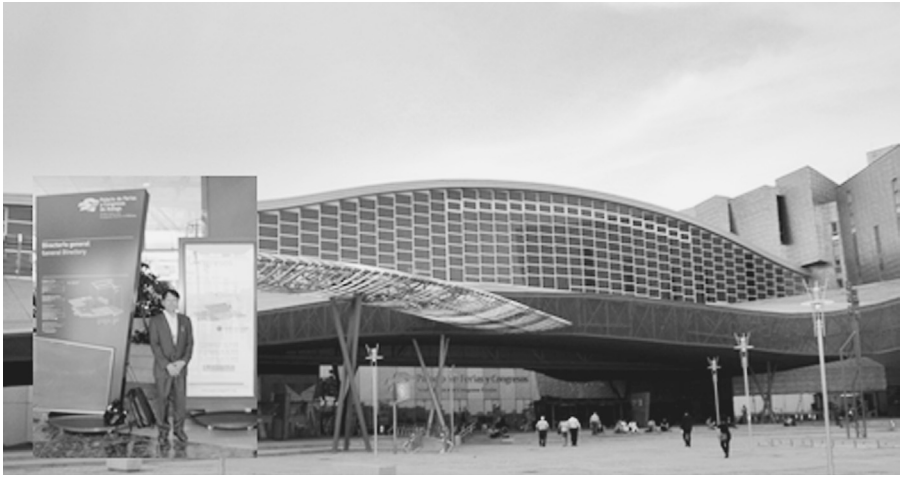

図１．Malaga市のPalacio de Ferias y Congresos de Malagaと会場内の筆者

＊ 日本赤十字広島看護大学　専門基礎　uno@jrchcn.ac.jp

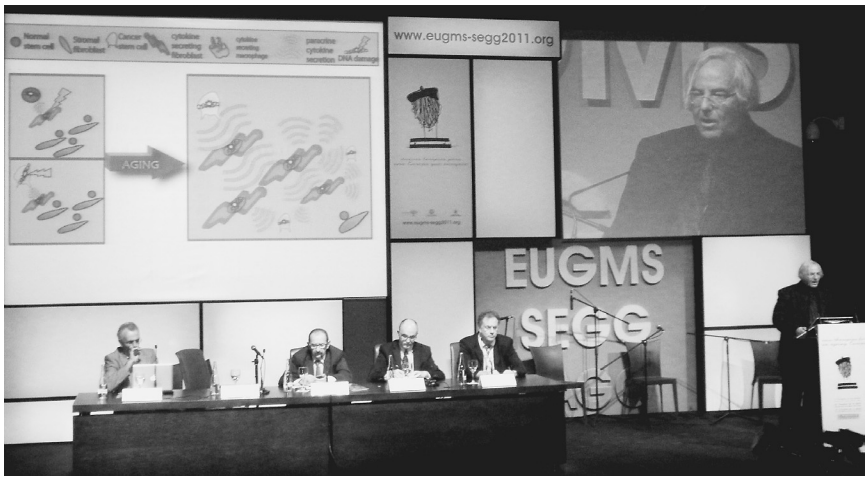

図２．イタリアのClaudio Franceshi教授の老化のメカニズムに関する講演

Opening Ceremonyでは，前回会長のアイルランドのO'Neill氏に会うことができた。今回の会長であるCruz-Jentoft氏の挨拶は英語であったが，Málaga市の市長をはじめ行政担当はペイン語で挨拶した。

このCeremonyの最後にフラメンコの実演があった。スペインで有名なダンサーの一団らしく，司会者は学会参加者に「あなた方は，本当の芸術を今から見ることになるだろう」と自信たっぷりに紹介した。演目はビゼーのカルメンで，激しい踊りが40分近く続いた。フラメンコというのは，踊り子，後ろの演奏者，歌い手などが刺激し合い，全体としては緊張の中に一つのある感情を掛合いで共有し，一定の情熱をかもし出し舞台芸術であることを，十分納得した。ジャズのジャムセッションに通じるものがあると思ったが，激しい歌と踊りには圧倒された。

学会２日目のPhysical Activityは楽しみにしていたセッションであった。筆者も抗加齢医学専門医であり，講演で運動の抗加齢効果や認知症の予防効果などを，最近のデータをもとに話すことがある。ドイツのJügen Bauer氏の“Benefits of exercise along disease spectrum”は，高齢者における運動が各種疾患の予防になることをメタ解析を通じて述べたものであった。スペインのAntoni Salivá氏の“Exercise and Alzheimer's disease”は，スペイン語であったが，スライドは英語であったので，よく理解できた。氏は包括的なALzheimer病の治療における運動療法の位置づけを他の認知症疾患も含めて講演した。これらの講演の内容はおおよそ筆者が日頃から親しんでいる話で，特に新奇なものはなかったが，世界的にこのような知識が共有されることは大変好ましいものに思えた。続いてのスペインのHosé Antonio Sera-Resach氏の“How to prescribe exercise”は，運動タイプ別に高齢者における運動法を詳しく述べた。

今回の学会は，スペインの国内学会であるSEGGとアンダルシア地方学会であるSAGGとの共催でであったため，大会のプラグラム，研究発表等が英語とスペイン語が混じっており，簡単な日常スペイン語しかわからない筆者には，戸惑うことが多かった。米国などから来た参加者などは，スペイン語の発表が始まると席をはずす者が多かったが，おおらかなスペイン風の学会であった。とりわけ，SEGGは19848年に創設され，ヨーロッパでもっとも古い老年医学会にひとつであるという。会場には医師のみならず，各種のパラメディカルスタッフの参加が見られ，学術・学問にひた走る日本の学会とは違い，スペイン風に老年医学を実践しているような印象を受けた。

コルドバのこと

学会の中日の午後にコルドバCordobaに行った。MálagaからAVE（スペインの新幹線）で50分位しかかからない。コルドバ滞在時間は，実質２時間半ぐらいしかなかったが，以下に述べるような理由でどうしても，一度訪れてみたかった。

コルドバはBC２世紀にはローマ人の支配下となり，ローマの属州ヒスパニア・ウルテリオールの州都となったが，ローマ帝国の衰退とともに西ゴート族の支配下に入った。8世紀にはイスラム教徒の後ウマイア朝の本拠となり，13世紀にキリスト教徒の国土回復戦勝利によりイスラム勢力がスペインから追い出されるまで，繁栄を極めた。10世紀のコルドバは人口100万を擁し，600のモスク，300の公衆浴場，50の病院，80の公立学校，17の高等教育機関，

図３．コルドバのグアダルキビール川のローマ橋から見たメスキータとその内部

何十万冊もの写本を蔵する20の図書館があり，中世最大の文化都市国家であった。ここで，古代ギリシャやローマの文献がアラビア語よって伝えられ，これを学ぼうとする人々がヨーロッパ中から集まり，モスクの中にはマドラサ（学院）が設けられた。やがて，アラビア語はラテン語に訳され，アリストテレスやプトレマイオスなどの業績をヨーロッパ人が知ることとなった。そのような学問の跡地の空気を感じてみたかった。

また，コルドバは，哲学者セネカ（紀元前１年-～65年４月）の出身地であり，彼はネロという病的，狂的な皇帝の輔弼として，ストア派思想に基づいてこれを善導しながら，ついには謀反の嫌疑をかけられ自決を命じられた。セネカの著書は，ストア思想とキリスト教精神の重なりもあり，欧米では未だ広く愛読されている。セネカの代表作「生の短さについて」は，「生は短く，術は長い」というコス島のヒッポクラーテスの言葉を引き，生をいかに生き，さらに死をいかに生きるかを説いたストア思想の真髄であり，近年日本でも広く読まれるようになった。老年医学や抗加齢医学を勉強するに当たり，セネカの思想はその哲学的バックボーンであると筆者は考えていた。

コルドバ駅からとりあえず，タクシーでメスキータMezquitaを訪れた，メスキータとは，イスラム教徒が礼拝に集まる場所，つまりモスクを意味する。モロー人の八百年近い占領時代，このモスクはメッカについで二番目の大きさであり，２万５千人が収容できたという。

メスキータの内部は100本以上の脊柱が林立し，文字通り壮麗壮大で，筆者は感動を覚え，いかに当時のイスラム文化が進んでいたかを得心した。モスクの中央部分は，キリスト教支配になってからここに大聖堂を造り改造された。それを見たローマ皇帝カルル５世は，「どこにでも造れる建物のために，世界に一つしかない建物を壊してしまった」と嘆いたという。

コルドバ市街の眺めは，グアニダールキビール川にかかるローマ橋からが一番だとされている（図３）。この橋はBC１世紀にアウグストィスの治世に造られた。

終わりに

今回の学会のポスターは，ピカソをあしらった画家の絵であった。Málaga市はピカソ生誕の地であり，学会のポスターも画家をあしらったもので，Piccaso's cityとあった。宿泊したホテルから遠くない市内にピカソの生家があり，その近くにはCasa natal Picassoがあり，その近くにはピカソ美術館Museo Picassoがあった。学会の昼休みを利用してタクシーで訪ねた（図４）。

ピカソ美術館には，何十点にも及ぶピカソの絵画や彫刻が，年代順に展示してあった。筆者は日本でのピカソの展覧会に出かけたことがあるが，そのときは感じなかった激しい生の情熱が全体にみなぎっていた。展示物からあふれ出るエネルギーに圧倒され，精神的に疲労を覚え学会場に戻った。

コルドバへの新幹線の往復で車窓から見える景色には，樹木の茂る山や森といったものはなく，黄土色ないしは日に焼けたような赤茶色の荒野に，人工的に植えたオリーブやブドウの木々が並んでいるのみで，各駅に近づくと，ようやく畑や緑の丘が現れるといった具合であった。筆者は，ワシントン・アーヴィングが1832年にロシア人友人とスペイン人従

図４．Malaga市のピカソの生家Casa Natal de Picasoの前の筆者

者と一緒にセビーリャからグラナダへ旅行して書いた「アルハンブラ物語」の冒頭の文章を思い出した。「スペインとは大部分は気候の厳しい，物憂い国なのである。険しい山々，木など生えていない広漠たる平野，荒涼としてうら寂しいアフリカの地と通じる，言葉にできない静けさと孤独。鳥が休めるような木立がない・・・・」と記していたが，まさに小鳥がさえずるような木立は，都市の中以外には見あたらなかった。

この厳しい自然の中で，紀元前より様々な異民族の支配の下で，生き延びてきたスペインの人々の生に対するエネルギーはすざましく，フラメンコやピカソの作品群に圧倒されたのは，その生に対する情熱であったような気がする。

謝　辞

本学会への参加は日本赤十字広島看護大学の共同研究費で参加した。

文　献

European Geriatric Medicine, Volume 2, Supplement 1, Pages S1-S220, September 2011.